



大 地

令和7年1月号

校長 指崎 邦久

冬休みの間、冷たく静まり返っていた校舎に、子供たちの明るい声が響き、温かくなり取りが帰ってきました。友達と一っしょに笑っている姿や、真剣なまなざしで話を聴く表情、分かりやすく説明しようと懸命に話す姿を目にします。休み時間には、積雪で白くなったグラウンドに出て、雪だるまを作ったり築山から滑ったりして元気に遊ぶ姿がみられます。下校時には、「先生、またね、さようなら」という明るい声が聞こえてきます。令和7年度の初めも、友達と楽しく過ごし、充実した学校生活を送っているようです。ご家庭での過ごし方やご家族との触れ合いがこの姿につながっていると受け止めています。ありがとうございます。



さて、3学期が始まりました。始業式では、次のように話しました。

挑戦しましょう

1. 難しいこともあきらめずに取り組みましょう。
2. できることがもっとできるように一生懸命に取り組みましょう。
3. 人のよいところを真似したり、よいところを合わせたりしましょう。
4. 昨日よりも今日が、今日よりも明日が、少しでもよくなるように挑戦しましょう。



いろいろな場面で、前向きに取り組むことで多くのことを学べると考えています。どんどん挑戦してもらいたいです。

挨拶で気持ちよく

寒い中、元気に登校してくる子供の中に、気持ちのよい挨拶をする子供がいます。遠くから挨拶をする子供や、友達との話を一時中断して自分から挨拶する子供、校舎の工事関係者にも自分から挨拶をする子供、そのような姿を見ているだけで、気持ちよくなります。気持ちのよい挨拶ができる子供は、社会に出てからも人と仲よく生活できそうだと思います。挨拶を進んでする子供は、相手を大切にしている思いやりのある子供だと思います。



子供たちには、将来にわたって幸せに暮らしてもらいたいと思っています。気持ちよい挨拶が、相手とのよい関わりに力を貸してくれるならば、ぜひ、気持ちのよい挨拶ができるようになってもらいたいと願っています。挨拶は、繰り返すことで身に付くものです。小さなころから身に付けておくことで育つ心情や態度もあると信じて、指導し続けていきたいと考えています。

ご家庭でも、進んで挨拶をするように話していただけるとありがたいです。

先日の休み時間に、どんな勉強をしたか子供たちにたずねると、「九九をしました」と教えてくれました。そのうち一人が、九九を聞かせてくれることになりました。しかし、緊張のせい、うまく言えません。それでもその子供は一生懸命に思い出しながら言おうとします。横で見守っていた子供が、口をばくばく動かしながら声にならないヒントを出していました。その隣の子供は、柔らかい表情で指を折りながら友達を見守っていました。友達の助けもあり、最後まで披露することができた子供は、うれしそうに笑いました。「次は、ぼくです」ヒントを出そうとしていた子供が上手に披露しました。「七の段言えます」、「八の段言えます」次々と言ってくれました。一人目の子供のねばり強いやる気と友達を見守る優しさのおかげで、何気ない休み時間が子供たちの前向きな姿を感じられた楽しい時間になりました。

やる気と優しさが合わさると素晴らしい効果が出ると、子供たちに改めて教えてもらいました。

感動を大切に ―たかが跳び箱、されど跳び箱―



先日、他郡市の小学校校長と話をした際に、次のような跳び箱の指導が話題になりました。窪小学校の子供にも同じ部分があると思いながら、聞いていました。その内容を紹介します。

平成の時代にクラスの全員に跳び箱を跳ばせたいと思って指導をした。運動が苦手で体育が近付くとおなかが痛くなる子供や、跳び箱がこわくて跳び箱の前で止まってしまう子供もいた。それでも、跳び方のコツを伝え、友達同士教え合い、励まし合えるように気を付けながら学習を繰り返すと、それまで跳び箱を跳べなかった子供が跳べるようになったり、以前跳べなかった段数を跳べるようになったりする子供が出てきた。出来なかったことができるようになったときは、自然と拍手が起き、喜び合う声が響いていた。それでも、どうしても跳べない子供がいた。跳び箱の最後の日、わたしは結果が出なかったその子供に、ここまで一生懸命に取り組んだ努力を認める言葉をかけようと思っていた。すると、授業の半ばを過ぎたころに、ついに跳ぶことができた。飛び上がって自分のことのように喜ぶ応援していた子供たち、汗なのか涙なのか分からない水分を流しながら喜ぶ跳べた本人、その光景は忘れられない。



跳び箱が跳べた、跳べないで人生が変わることはない。たかが跳び箱である。しかし、何回も挑戦してできた達成感や感動、友達から応援してもらったこと、一緒に喜んでもらったことは、その先の人生でも、背中を押してくれるのではないかと思っている。されど跳び箱である。これほど大きな感動はめったにできないが、「たかが、～～、されど～～」は日常の中にたくさんあると思う。「たかが」の中に価値を見付け、一つでも多くの感動を子供が感じられるようにすることが、わたしたち大人の仕事だと思う。

この話を聞きながら、窪小学校の子供の姿を思い出しました。

学校では、適切な課題を設定するとともに、やってみようと思えるようにコツを伝えることや、応援し合える環境になるように工夫・努力をしています。子供が向かう課題は、この話のように克服できるものばかりではありませんが、少しでも多くの感動が生まれるように教え、見守りながら子供の挑戦を支えていきたいと思っています。

